

『新中国未来記』をめぐって——梁啓超における革命と変革の論理——

山田 敬三

はじめに

十九世紀末、康有為によって唱えられた変法自強説は、今日の時点からは想像を絶するほどの過激な思想であった。変法派は、その改革論が少数民族である満州族の皇帝に公認されたために、漢民族を中心とする革命派からは、体制擁護の改良に過ぎないという非難を受けたものの、しかし、戊戌の「変法」が実行された一八九八（光緒二四）年の時点での実効性ということでは、それは文字通り天下を震撼させる衝撃的な改革論であった。大清帝国の守旧派にとつて、変法維新の実施が彼らの存立基盤をおびやかす危険な政策であったことは、それを抑止するために政変が發動されたという一事からも明らかであろう。

光緒帝の下で、かりに戊戌変法がつつがなく継続していたならば、その後の中国の道行きはまったく異なっていたに相違ない、というのは歴史的になんの意味ももたない戯言にすぎないけれども、ただ、そう考えてみたくなるほどの革新性を、変法自強説は具えていた。しかも、その説の究極には、家族の解体や男女の完全平等、階級のない社会までも視野にとりこんだユートピア——大同世界が想定されており、このような康有為の理想は孫文の革命論をはる

かに凌駕するラディカルなものであった。

だが、康有為による改革のプログラムはまぎれもなく立憲君主制の実現であり、清朝政権の打倒をめざす革命派からは保守反動呼ばわりされ、愛弟子の梁啓超とも、一時期この問題をめぐって確執を生じた。その直接の原因は「孫康合作」計画と「飲冰室自由書」をめぐる師弟間の論議である。ここでは、康有為の掌中から離脱することができず、革命と改革のはざまで揺れ動いた梁啓超の姿を、彼が唱えた「小説界革命」や、その実践面での答案である『新中国未来記』との関連で検討することにした。

一、「孫康合作」計画の崩壊と文学界の革命

一八九九年二月二〇日、梁啓超は横浜港から香港丸に乗船してハワイへと出航した。康有為による事実上の追放である。『梁啓超年譜長編』では、このことを単に「美洲華僑の邀」に応じたものと記すのみであり、確かにこの年、梁にはアメリカに赴いて「商会を開く」心づもりがあった。⁽¹⁾しかし、ホノルル行の原因が、「康門十三太保」による孫文ら革命派との合作行動の結果であったことは、このころ父、馮鏡如の命によって梁の門下にあった馮自由の記録する通りである。

馮自由の「康門十三太保与革命党」(『革命逸史』第二集)によれば、一八九九年の晩春ないしは初夏のころ、犬養毅は早稲田の私邸に孫文と陳少白、梁啓超、宮崎寅藏、柏原文太郎ら数人を招き、革命派と維新派とが連合して国事にあたるよう斡旋したという。この時、梁は孫文の言説に対して「異常に傾倒」し、両者のまみえる機会が遅かったことを大いに慨嘆した、と記すのである。

この後、両派の交流は盛んとなり、「孫康合作之声浪」が東京・横浜の間には轟いた。梁啓超はまた章炳麟、唐才常、周孝懐、錢恂らを孫文に引き合わせ、孫文と章炳麟の交際が梁の仲介によって始まった。⁽²⁾孫文は梁の心が革命に

傾くのを見て、両派を連合して革命運動を進める計画をもったようだが、当時、日本にいた康有為門下の半数がこれに同調し、両派の有志は合併後に孫文を会長、梁啓超を副会長にするよう協議したという。梁はこの旨を長文の手紙にしたためて、当時シンガポールにいた康に送った。⁽³⁾ 馮自由はその書簡の内容を次のように要約する。

国事敗壞して此に至る、庶政を公開して、共和政体に改造するにあらざれば、危局を挽救することあたわず。今上の賢明なることは、国を挙げて共に悉る。将来革命成功の日、尚し民心が愛戴すれば、亦た挙げて總統となすべし。吾が師は春秋已に高し、大いに林泉に息影して、自ら晩景を娛しむべし。啓超等自らまさに往を継ぎて来を開き、以て師恩に報ずべし。

これに署名した欧榭甲ら康門の一三名は、各地にいた仲間から「十三太保」（「太保」とは天子を補佐する古代の官名であるが、広東語では非行少年を意味する）と呼ばれ、彼らの言動は康有為を激怒させた。⁽⁴⁾ その結果、梁啓超は康有為によってただちにホノルルへ赴いて保皇会の仕事につくよう厳命され、欧榭甲もサンフランシスコで「文興報」の主筆となるよう命じられたのである。

かくして、「孫康合作」の計画は瓦解したが、しかし、それによって梁啓超の思想がすぐさま変法自強の次元に遡及したわけではない。そのことは、『清議報』誌上に連載された「飲冰室自由書」をめぐる康有為と梁啓超の激しいやりとりからも明らかである。

また、同年末から翌一九〇〇年一月にかけて記された『夏威夷遊記』⁽⁵⁾ は、日本での活動の場をなくした梁が、ハワイ航路の船中で思索を深め、文筆活動のあり方について考究した日記形式の文面であるが、この文章の中で梁啓超は「詩界革命」の語を初めて使用し、詩作の革新について具体的な提案を行なうとともに、徳富蘇峰を範とする「文界革命」についても言及する。『夏威夷遊記』一八九九年二月二五日の項では次のように記す。

二十五日。風稍く定まりぬ。初めて開船せし日の如し。数日来、偃臥して一事なし。乃ち詩を作り以て自ら遣さむ。余は素と詩を作る能わず。記誦せし所の古人の詩、二百首に及ばず。生平為る所の詩、五十首に及ばず。今次忽ち異興を發し、兩日内に十余首を成す。怪事と謂うべし。余は詩をつくる能わずと雖ども、然るに嘗つて詩を論ずるを好み。以為らく詩の境界は、千余年来鸚鵡名士（余は嘗て戯れに詞章家を名づけて鸚鵡名士と為し、自ら尖刻に過ぐと覺ゆ）に占尽さると。佳章佳句ありと雖も、之を一読すれば、某集中に在りて曾つて相い見し者に似たり。是れ最も恨むべき也。故に今日、詩を作らざれば則ち已む。若し詩を作らば、必ず詩界の哥命布、瑪賽郎マゼランと為り、然る後可なり。猶お欧州の地力已に尽きたるがごとし。生産過度にして新地を阿米利加アメリカ及び太平洋沿岸に求めざる能わざる也。

この後に続けて、「詩界のコロンブス、マジエランたらんと欲すれば、三長を備えざるべからず」というのであるが、その「三長」とは、第一に「新意境」（を詠うこと）であり、第二には「新語句」（の使用）であり、第三には「古人の風格をもつてこれに入る」ことであつた。もしこの「三者を具備」すれば、もつて「二十世紀支那の詩王たるべし」という。この時、彼はここで初めて「詩界革命」という用語を使用したのであつた。

その三日後、船はまた風に見舞われた。浪は船中に侵入し、数寸の深さに達した。それは数十年來、太平洋を航海してきた船長にとってすら、かつて経験したことがないほどの大時化であつたという。この時、梁は作詩の筆を断ち、読書に専心した。彼が手にしたのは、ほとんどが徳富蘇峯に係する書物であり、梁啓超はそれらをモデルとする「文界革命」について、ここで言及する。

余既に詩を為るを戒む。乃ち日々読書を以て消遣す。徳富蘇峯が著す所の将来之日本及び国民叢書数種を読む。

徳富氏は日本三大新聞の主筆の一なり。其の文は雄放痛快。善く歐西の文思を以て日本文に入る。実に文界の爲に別に一生面を開く者なり。余は甚しく之を愛す。中国に若し文界革命あらば、当に亦た是に起点せざるべからざる也。蘇峯は日本に在りて平民主義を鼓吹するに甚だ功あり。又僅かに文豪を以てせざる者なり。

文学の歴史に即していえば、この『夏威夷遊記』は何よりも、梁啓超がその中で「詩界革命」と「文界革命」に初めて言及したという意味で重要な意味をもつ。それとともに、それぞれの内容がたとえ明確でないまでもすでに提示されていて、これらによって我々は、梁のいうそれらが何であるかある程度推測することは可能である。その内容については、機会を改めて検討することにしたいが、ここでは梁が文学界の革新に「革命」という用語を導入した事実に目を向けておきたい。それは経典にいう「易姓革命」の意ではなく、明治維新後の日本が英語の revolution に対応して使用した「革命」という用語からの転用であった。そもそも、梁が「革命」の語を文学の革新に適用したのはこの時が最初であり、それは三年後の「小説界革命」へとつながる画期的な提唱であった。

二、「飲冰室自由書」をめぐって

『清議報』は第二五冊（一八九九年八月二十六日）から梁啓超の「飲冰室自由書」を掲載し始め、それは同誌が第百号で停刊となった後も、引き続き『新民叢報』誌上に連載された。しかし、梁が連載を開始するとまもなく、それに対する康有為の叱責があったらしく、梁は光緒二十六年四月一日付（一九〇〇年四月二十九日）で長文の手紙を康有為に送り、「自由」やフランス革命についての彼の考えを述べて反論した。⁽⁵⁾

自由の義における来示、深く悪みて之を通絶す、而るに弟子始終此の義を棄つることを欲せず。窃かにおもえら

く天地の公理と中国の時勢、みな此の義にあらざれば功をなさざるなり。弟子の自由を言うは、圧力に対してこれを言うにあらず、奴隷性に対してこれを言う、圧力は施す者に属し、奴隷性は受くる者に属す。中国数千年の腐敗、その禍は今日に極まるも、その大原を推さば、みな必ず奴隷性より来たれり、此の性を除かずば、中国は万も世界万国の間に立つことあたわず。

これによって見れば、康有為は「飲冰室自由書」(以下「自由書」と略称)に述べられた「自由」やフランス革命についての梁啓超の思想を危険視し、書簡をもってその考えを改めるよう指示したのである。それに対して梁は、彼のいう「自由」が中国人の国民性にひそむ「奴隷性」の除去にあるのだと主張し、康が忌避するフランス革命については次のように釈明する。

而して先生しばしば^{フランス}法国大革命を引きて鑑となす。法国革命の惨は、弟子深くこれを知る、日本人これを忌みこれを悪むこと尤も甚だし。然りといえども此れはもって中国を律するを援くるにたらざるなり。中国と法国は民情もつとも相反す、法国の民は最も動を好み、一時としてよく静なることなし。中国の民は最も静を好み、千年を経て動かず。故に^{ルソー}路梭諸賢の論、これを法国に施さば、誠に取乱の具となり、而してこれを中国に施さば、適に興治の機となる。

自由は、それを使用する国民性の相違によって毒にも薬にもなるのであって、それは動を好むフランス人にとって禍であったが、静を好む中国人には必要なものである、というのが梁の弁明である。したがって、「フランスの惨禍は、革命家たちが、自由の名を借りることで禍を生じたのであって、自由が禍となったのではない」と論駁する。続けて梁は、自由に関する古今の史実を引きながらさまざまに論じ、それがフランスに特有の思想ではなく、「イギ

リスのミル、ドイツのカント、近世のすべての大儒、全世界の信奉するところである」という。

つまり、梁啓超にとって「自由」はフランス風の急進的な革命論に密接した考え方ではなく、むしろイギリス議会議主義の基礎となる思想なのであって、それにもとづく中国の改革が必要なことを康有為に説き明かそうとしているのであった。

けれども、ここでいう梁の「自由」と、彼が「自由書」で展開した議論とは必ずしも一致するものではない。一八九九年に公表した「破壊主義」と題する文章（『清議報』第三十冊）で、梁は明治維新における伊藤博文や大隈重信、井上馨らを「急激の手段」によって「数千年の旧物を摧倒」した破壊主義者であると称賛し、ヨーロッパや日本におけるルソー思想の役割を次のように評価していたのである。

歐洲近世の国を医する国手、数十家を下らず、吾その方（処方箋）の今日の中国に最も適するを視るに、それただ盧梭先生の民約論か。是の方、前世紀及び今世紀の上半に当りて、これを歐洲全洲に施して效あり。明治六、七年より十五、六年の間、これを日本に施して效あり。

こう記した後で、梁は『民約論』が東洋に伝来して「文明の母」となり、「大同」をもたらすことになるのだと絶賛した。いわく「嗚呼、民約論！ なお其の東に来るや、大同たり大同たり！ 時に汝の功なり」と。同じく「自由書」の一環を成す「文野三界之別」においても、彼はルソーやモンテスキューの思想を無条件で受け入れる急進的な自由主義者であった。

孫文ら革命派との合作活動によって康有為の怒りをかい、ハワイに放逐された梁啓超であったが、では「自由書」に見られる梁啓超の理念と、「自由」の義を立憲君主に換骨奪胎して康有為に釈明する梁との間の落差はどう理解すればよいのか？ この疑問に答える内容を、三年後に実行された雑誌『新小説』の創刊と「小説界革命」の提唱、な

らびに『新中国未来記』の創作から検証することにした。

三、小説界革命の提唱

雑誌『新小説』は、中国最初の小説専門誌として光緒二十八（一九〇二）年に創刊された。奥付に記された「編輯兼発行人」は、初年度十二号分が「趙毓林」となっているものの、それはあくまでも名義上の処置であって、実際の主催者が梁啓超であったことは周知の事実である。第二年度分には奥付がない。「発行所」は、創刊号から第四号までが横浜市山下町百五十二番地（現在の中華街）の「新小説社」、第五号から第十二号までも同じく新小説社となっているが、住所は「印刷所」である新民叢報社活版部の所在地に合わせて百六十番地に移っている。第二年度からは、表紙に「上海広智書局発行」と記されているが、「発行所」は変わっても、「印刷所」は従来通り日本国内であったろう、という推定がある。

小説界革命の舞台となったのはもちろん、この雑誌『新小説』である。よく知られているように、それは最初、同誌創刊号の巻頭論文「論小説与群治之關係」で提唱され、雑誌自体も「訳印政治小説序」（一八九八年）以来の梁啓超の宿願をたす手段として発刊された。『政治小説新中国未来記』は、この作品を発表するために『新小説』を出した、と梁が述べるほど、期する所のあった作品である。ちなみに、その「緒言」では、そのことを次のように記している。

余この書を著さんと欲して、茲に五年矣。顧みるに卒に一字を成すあたわず。況んや年来身に数役を兼ね、日に寸暇なし、更に安んぞ能く余力を以て此に及ばさんや。顧みるに此の類の書は、中国の前途に、大いに裨助あることを確信す。夙夜これを志して衰えず。既に今全書の卒業するを俟ちて、始めて諸を世に公にせんと欲するを念えど、恐らくは更に数年を閲せんも、殺青の日無からん。限るに報章を以てし、自ら鞭策を用いるにしかず。

寸を得て尺を得なば、聊か無きに勝らん。「新小説」の出づる、其の発願は専ら此の編を為さんとしてなり。

梁啓超が「此の書」——『新中国未来記』の著述をこころざしたのは五年前であるという。それは、戊戌の政変によって彼が中国本土を脱出し、日本へ亡命する途上で、大島艦の荒木艦長から柴四朗東海散士の『佳人之奇遇』を見せられ、その漢訳を企図したという一八九八年を意味するであろう。同年十二月、横浜で発行した雑誌『清議報』創刊号は、漢訳『佳人之奇遇』の連載を始め、その序文として梁は「訳印政治小説序」を執筆する。この時、彼は借り物としての政治小説ではなく、やがては自らの手になる作品の創作を発願したのである。だが、実際に着手するにはあまりにも多忙であった。

その後、あしかけ五年の歳月は流れたが、このような作品が中国の前途に大いに役立つであろうことを確信し、制作の志は日夜衰えることがなかった。しかし、全書の完成をまってこれを世間に公刊しようとすれば、恐らくはさらに数年が経過して、殺青（書物の完成）の日は来ないであろう。それならば、定期刊行物によって自らを鞭打ち、少しずつ成果をあげるようにすればよい。——そう考えて、梁は雑誌の発刊に踏み切ったという。

こうして『新小説』第一号は発行され、その冒頭には「論小説与群治之關係」（小説と社会の關係について）が掲げられた。「一国の民を新たにせんと欲すれば、先ず一国の小説を新たにせざるべからず」と説き起こして、「故に今日群治を改良せんと欲すれば、必ず小説界革命より始め、民を新たにせんと欲すれば、かならず新小説より始めよ」と結ぶこの一文は、要するに変法維新派の政治理念を小説に盛り込んで、啓蒙活動に役立てようとする趣意書であり、功利的文学論の典型であった。

梁啓超によれば、小説には「不可思議の力」があって、「人道を支配する」（ここでいう「人道」は人間の行為もしくは人間そのものを意味する）。では、小説がどうして「人道を支配」できるのか。それには「四種の力」があるからである。その一は「薰（薰染）」、その二は「侵（侵潤）」、その三は「刺（刺激）」、その四は「提（同化）」である。そして

「四種の力」を例証するために、彼は『楞伽經』『紅樓夢』『水滸伝』『華嚴經』『西廂記』『桃花扇』『野叟曝言』『花月痕』等々の仏典や俗文学作品を引用する。仏典を引いたのは、清末の変革運動にたずさわる知識人たちにとって、仏教が精神的な拠り所の一つであったからである。

だが「此の四力」は、それらを善い方に使うなら「億兆の人を福する」ことが可能であるけれども、もし悪い方に使えば「千載を毒する」ことになる。しかも従来、小説は常に「中国群治腐敗の総根原」となってきた。中国人の「状元宰相の思想」、「妖巫狐兔の思想」はいずれも小説に源を発するものである。「下は屠（肉屋）、爨（飯炊き）、販（商人）、卒（使）、媼娃童稚（女、子供）より、上は大人先生、高才碩学に至る」まですべてがこうした思想の影響を受けてきた。「哥老会」や「大刀会」のごとき秘密結社から、はては「義和」団の事件が起こったのも、『三国志演義』にいう「桃園の拝」や『水滸伝』の「梁山の盟」のせいである。

中国での小説は、かくして諸悪の根源とみなされてきたが、しかしそれも小説に人を感化する「不可思議な力」があるからである。したがって、「今日、社会を改良しようとするならば、必ず新小説より始めねばならない」のだ。

梁啓超の以上のような論法は、文学の自律性を重く見て、文学に対する政治の直接的な介入を忌避する西欧的近代文学の観点とは、まっこうから対立する概念である。だが、梁にとってそうした文学の論議は、この際、問題ではなかった。彼はただ、小説のもつ効用に着目して、それを自分たちの政治的理念達成の啓蒙手段に転用しさえすればよかったのである。ただし、梁の意図とは無関係に、「小説界革命」は中国文学史に「近代文学」の礎石を構築することになる。その展開の軌跡を、雑誌『新小説』所収の政治小説『新中国未来記』に即して、やや詳細に追って見よう。

四、『新中国未来記』の構図

政治小説『新中国未来記』は、梁啓超がこの作品を発表するために雑誌『新小説』を発刊したというほどの意気込

みでとりくんだ創作であった。全五回からなる未完の作で、その第一回と第二回は光緒二八（一九〇二年一月五日）発行の『新小説』創刊号に掲載し、第三回は第二号（同年一月二十五日）、第四回は第三号（同年二月二十五日）にそれぞれ連載、ここまでは順調に進行したが、第五回は半年以上経過した後の第七号（光緒二十九年七月十五日）に登載した。そして、後日まとめられた梁の文集『飲冰室專集』には第四回までしか収録していない。つまり、第五回は梁啓超にとって自作とは認めたくない作品だったのである。以下、その内容に即して具体的にみることにしよう。

第一回 楔子（まくら）

小説の時代背景は、雑誌の発行された一九〇二年より六〇年後の一九六二年正月一日。ただし、作中の年号には百年くりさげた西暦と康有為の提唱した孔子紀元が使用されており、この年は西暦二〇〇二年、「孔子降生後二千五百一十三年」である。それは全国人民が「維新五十年大祝典」を挙げる日で、おりしも「万国太平会議（国際平和会議）」が開催されるため、各国の全権大使が南京に集合している。

このような時代設定から逆算すれば、作者の描く一九一二年の中国はすでに維新を実現し、「大中華民國」と称して首都を南京に定めているのであって、それは同じ年、南京に成立した中華民國臨時政府の元年とも偶然に一致する⁽⁶⁾。しかも、その「維新」は皇帝の自発的な退位によって成立したもので、初代の大統領は羅在田（光緒帝）となっている。この時点での梁の理想は、すでに立憲君主ではなく、共和制の採用であったことが判明する。ちなみに、それぞれに対応する年号と事項を次に図示する。

西曆	小説中の西曆	孔子紀元	干支	事項
一九〇二年	二〇〇二年	二四五三年	壬寅	『新中国未来記』の発表
一九一二年	二〇一二年	二四六三年	壬子	大中華民國の成立

一九六二年 二〇六二年 二五二三年 壬寅 維新五十年大祝典を挙行

「維新」は、しかし共和制ではない。それはあくまでも帝政のもとに憲法を制定し、国会を召集するものであって、日本の明治維新をモデルとした「立憲君主制」の確立こそが変法維新の理念であった。にもかかわらず、梁が十年後に共和制国家の実現を描いたのは、むしろそれが当時の彼の願望に合致する目標であったからにはかならない。だが、それが「革命」ではなく「維新」と表記されているのは、彼の理想が武力によってではなく、平和的な手段——ここでは光緒帝の自発的な退位と初代大統領への就任——によるものと想定されているからであろう。そして、そのことは康有為の説く「大同」社会の究極的な目標とも矛盾しない理想であった。

ただこの時点で、一〇年後の一九一二年に共和国家の成立を夢見ることは、変法維新運動のプログラムにはなく、師の康有為の見解にも違背する先走った提言であった。そのことを承知の上で、梁は自らの押さえ切れぬ願望をこの小説に仮託したのである。わずかに、「維新」という用語の使用によって「革命」とは一線を画したものの、しかし実際には共和政体の実現を目指した梁啓超のプランは、革命派と維新派が実際運動の中で激しくぶつかり合っていた清末社会にあって矛盾をはらんだ論理とならざるを得ず、後述するように、それが『新中国未来記』第三回で展開される、黄克強と李去病による論争へもつれこむことになるのである。

ところで、この祝典には孔子一族の子孫で全国教育界会長・文学大博士である孔弘道（字は覚民、通称曲阜先生）の講演会が設定されていて、彼は光緒二八（一九〇二）年壬寅から始まる「中国最近六十年史」を、祝典と同時に開催された博覧会場で講ずることになっていた。小説の第二回以下はその内容を速記して『新小説』に掲載したものであるという。ひとまず、第二回以下の内容をかいつまんで見ることにする。

第二回 孔覚民演説近世史 黄毅伯組織憲政党（孔覚民、近世史を演説し 黄毅伯、憲政党を組織す）

孔覚民によれば、六〇年の歴史は第一・準備時代、第二・分治時代、第三・統一時代、第四・殖産時代、第五・外競時代、第六・雄飛時代の六段階に分期され、第一段階では広東の自治、第二段階では全国国会の開設が実現する。

羅在田の初代大統領就任と黄克強の第二代大統領時代は第三の統一時代である。羅在田の羅は光緒帝の姓である愛新覚羅、在田はその載活という名を同音の漢字に置換したものであって、羅の大統領就任はとりもなおさず共和制の成立を意味する。また、その基礎を築いた人物として描かれている立憲期成同盟党の創始者黄克強（字を毅伯）⁽⁷⁾は、辛亥革命の領袖黄興（字を克強）とその氏名が偶然に一致して、後に作者自身をびっくりさせている。

こうした舞台装置をもちつつ、第二回では主として立憲期成同盟党（憲政党と略称）結成の由来と実践要綱が示され、その歴史上の功績が顕彰されるのである。つまり、作者梁啓超にとつて、憲政党は彼が何よりも実際に組織したいと考えていた理想の政党であった。ここに記された党の目的や組織原則、実践要綱はそのまま時の梁啓超の政治活動の基本的理念であったといえよう。今それらの詳細にふれることはしないが、ただ、維新にいたるすべての政治活動の基本を、一九〇二年当時の梁がそこに置いていたという事実は指摘しておかなければならない。そしてそれを語ることが、とりもなおさず『新中国未来記』執筆の大きな目的であった。

第二回の記述によれば、維新以後、立憲期成同盟党は中央政府の勢力を主張する「国権党」と、地方自治の権利を主張する「愛国自治党」、および民間の個人の利益を主張する「自由党」との「三大政党」に分かれたという。このように維新運動にたざさわった政党が、維新後に大きく三つに分かれるという見解は、実は梁啓超の独創ではない。また、この作品が採用した未来記の形式も、その根柢はすべて日本の政治小説に見ることが可能である。なかでも末広鉄腸の作品が、梁に与えた影響を無視することはできないだろう。これについては章を改めて検証することにした。

第三回 求新学三大洲環游 論時局兩名士舌戦（新学を求めて三大洲を環游し 時局を論じて兩名士は舌戦す）

この回は、維新運動の進め方に対する黄克強と李去病による議論の応酬である。黄克強は清末の大儒朱九江の高弟であった黄群の息子、李去病はその弟弟子という設定になっている。黄群こと瓊山先生は郷里の海南島で塾を開いていたが、日清戦争の後、中国の前途には大変動があると考え、二人をイギリスへ留学させたのである。出立に際して、彼は二人の弟子に康有為の『長興学記』一部を与えた。旅の途中、彼らは上海で譚嗣同に会い、譚が書き上げたばかりの『仁学』を筆写し、それらの本から多大の影響を受けたという。渡英後の二人は、オックスフォード大学の試験に合格、黄は政治・法律・経済などを学び、李は格致（自然科学）と哲学を専攻した。ともに三年の課程を終えた後、李はフランスのパリ大学、黄はドイツのベルリン大学に入り、これも一年半後に卒業、二人はヨーロッパ各国を漫遊して帰国し、一九〇三年にはそろって山海関に来てロシアの植民地と化した当地の状態に衝撃を受ける。こうして、国家の将来に関する議論が四十数回にわたって戦わされた。フランスやアメリカの革命を理想とする李と、立憲君主をめざす黄の意見が真っ向から対立し、容易に一致点を見出せない⁽⁸⁾。

最後に黄毅伯が「結論」としてまとめたのは、「全国の志士と連絡し、全国の国民を訓練し、事をなす時が来たならば、臨機応変にやるしかないのであって、ただ、万やむを得ざる場合の外は、決して軽々しく破壊の道には進まない」という折衷的な意見で、李去病もそれに賛成するのであったが、その立場はやはり、皇帝の自発的な退位による共和制の確立を意味するであろう。

第四回 旅順鳴琴名士合併 楡関題壁美人遠游（旅順に鳴琴して名士は合併し 楡関に題壁して美人は遠游す）

徹夜の議論を終えた二人は、翌日、ロシアの支配下に落ちた旅順の状態を見に行き、そこでは同郷の広東人が経営する「広裕盛」の主人から、苛政をしくロシア人とその手先となって良民を苦しめる中国人のことを耳にして激怒する。旅順の宿の食堂では、朝方、洋琴をかなでながらバイロンのドンジュアンを歌っていた陳猛賤（号は仲滂）に出会った。彼は湖北武備学堂を卒業後、母校で教師を務めていたが、当地の政界の腐敗を目にして辞職、今後の中露関

係を調査するため、ロシアを経由して旅順に定住する青年であった。

陳によれば、「東三省の土地は今やロシアのインド」となっている。彼は、中国に対するロシアのやり方を調査するため満州を視察したアメリカ議員のレポート『満洲帰客談』を二人に示した。そこにはコサック兵の横暴がつぶさに報じられており、著者の注記によれば、それは明治三六年一月一九日の東京「日本」新聞がサンフランシスコの「益三文拿」紙から訳載した文を「一字の増減もなく」引用した記事であるという。

二人は陳の案内で大連方面を見学した後、陳と別れて山海関の宿に戻ると、先日、酔った勢いで壁に記した詞「賀新郎」の下に、東欧へ遊学する途中の「端雲」という女性らしい人の手で、次韻された詞を発見した。二人はこの女性、なぜ西欧でなく東欧へ遊学するのか、東欧へ行くのになぜ香港を経由しないのかといぶかったが、もちろんその理由はわからない。とりあえず、その詞を「乗風紀行」に記入して汽車に乗り、天津を経て北京に向かった（批注によれば、旅順や満洲におけるロシア人の横暴に関する叙述は、日本の新聞記事を出典としている。なお、文末の「総批」では、詩界革命と文界革命に対する筆者の見解が述べられており、それは先述した『夏威夷遊記』の主張とも重なる内容である）。

第五回 奔喪阻船面靚怪象 対病論葉独契微言（喪に奔らんとして船は阻まれ両つながら怪象を靚 病に対して葉を論じ独り微言に契う）

黄克強と李去病は陳仲滂と別れた後、北京を訪れ、さらに上海へ赴いて同志を集めようとする。上海では黄の外戚陳星南の所に身を寄せたが、そこには黄の母親が亡くなり、父も病気であるという電報が届いていた。黄は帰省を急いだ、船便がなく三日間の滞留を余儀なくされた。

そんな時、彼らのもとへ「字字革、支那帝国人」と名詞に刻した宗明が尋ねてきた。その肩書きには「南京高等学堂退学生、民意公会招待員」と記されている。彼は陳仲滂の連絡によって二人の到着を知ったのであるが、開口一番「今日の支那、ただ革命あるのみ」と猛烈な革命論を弁じたて、母の死や父の病によって帰省を急ぐ黄の行為をなじ

るのであった。

その後、黄・李の二人は張花園で開かれた民意公会の大会に出席、そこで会長鄭伯才が唱える民族革命論に耳を傾ける。彼はかつて湖北武備学堂の教師を勤めていた時、『時務報』に掲載された「民権論」を非難したため「守旧鬼」と渾名されていたが、戊戌政変後は革命思想にめざめ、急激な民族革命論者に変身したのであった。

その翌日、彼らが張花園の「品花会」に参加して帰宅すると、陳仲滂からの手紙が届いていた。それはロシア人が壟断する蒙古の現状を憂え、これから蒙古へ出かけるという内容であるが、小説は未完のまま、ここで連載は打ち切られてしまった。

五、もう一人の作者・羅孝高

『新中国未来記』は、自らが提唱した「小説界革命」に対する作者梁啓超の実験的答案である。しかも、その最終回にあたる第五回は、梁啓超の文集である『飲冰室專集』第六冊所収の同書にも収録されていない。雑誌『新小説』掲載時にも、この第五回だけには作者名（飲冰室）の記載がない。そのため、この回は梁啓超の作ではないといわれてきた。余立新氏の「《新中国未来記》第五回不是出自梁啓超之手」（一九九七年『古籍研究』第二期）では、次のような五つの根拠をあげてそれが梁啓超の作品でないことを論証している。

第一点は、この第五回が『新小説』誌上、作者名の記されない唯一の小説であるということ。第二点は、梁廷燦編『飲冰室文集』、林志鈞編『飲冰室合集』のいずれもが第五回を収録していないという事実。第三点は、訪米中の梁にはそれを執筆するだけの時間的余裕がなかったことを、当時、『新民叢報』の編集責任者であった蔣観雲らと交わした書簡によって指摘する。第四点は、梁啓超の提唱した「新文体」による特色がこの回に限って認められないという表現上での相違。第五点は、革命派に対する醜悪な描写が、梁啓超の思想的実際にあっていない、という内容面からの

判定である。

余氏の明確な論点は説得的であり、全体として反論の余地はないのであるが、では、それは誰によって作られたことになるのか？

『新中国未来記』の第五回は光緒二九（一九〇三年七月発行の『新小説』第七号に掲載されているが、梁はこの年の一月から一〇月にかけて訪米中であり、その編集作業に従事できなかったただけではなく、余氏のいうようにその執筆も不可能であったと考えられる。『新小説』と並行して発行されていた『新民叢報』の刊行が危機に直面していたことも、蔣観雲にあてた次の書簡から明らかである。

別れしより幾んど両月、外に在りて寸晷すんくわいの暇なく、一字の文も作る能わず、叢報は日を指して立ちどころに斃れんとす。他は惜しむに足るなくも、惟だ此の報は現在社会に頗る勢力あり。其の此くの若きを聴けば、深く悲しむべきのみ。弟は閏五月杪を須まちて乃ち能く遄すまやかに返らんと決す。若し能く此の三月を支えなば、則ち弟婦り来たりて慮しんばかることなかるべけん。先生は大局の計の為に、憐れみを想見せんか。若し承うえて棄てざれば、孺博、孝高、伯勲、百里の諸君と熟商し、此の三個月を籌済するの法に勉めんことを望む、其の乞稿きこうに若何に応ぜんかの処、一に惟だ先生の命のみ。

この文面からは、まさにつぶれようとしている『新民叢報』の継続を、せめて彼が帰国を早めてもよいと考えた閏五月末まで、何とか維持してほしいという梁の切々たる思いが伝わってくるのであるが、こうした事情は『新小説』の場合も同じだったと考えられる。そのような雑誌の刊行を継続する上で、梁が相談相手として列挙している人名は、麦孺博、羅孝高、周伯勲、蔣百里の四名であって、なかでも梁啓超が自作の統編執筆を依頼できる人物ということになれば、それはかつて彼のために『佳人之奇遇』の漢訳に協力して実質的な翻訳者となり、また梁を助けて「和文漢

読法」の作成に尽力した羅孝高を置いて他には考えられない。しかもその可能性を示唆する内容が、『新中国未来記』の第四回には見てとれるのである。

先に述べた梗概にも見られるように、『新中国未来記』第四回には「端雲」と名乗る謎の女性が登場する。彼女は東欧へ遊学する途中の学生で、黄克強と李去病が酔った勢いで壁面に記した「賀新郎」に、憂国の思いを詠みこんだ詞を和韻し、次のような跋を記していた。

東欧に游学し、道々楡関に出づ。壁上の新題、墨痕なお湿やかなるがごとし。衆生沈醉せるに、尚お斯の人あり。循誦すること再三、国民の為に慶ぶ。蒹葭（章の若芽）と秋水とは、交臂を相い失す（すれちがいとなる）。我が勞を如何せん。廻腸に根触するも、率ね貂尾を續ぐ。癸卯四月、端雲并記。

これを見た李去病と黄克強は、彼女がなぜ西欧ではなく東欧へ游学するのか、どうして香港からでなくシベリア鉄道經由で東欧へ行くのかをいぶかるのであった。そして、端雲については第五回の末尾でもう一度、「王端雲：広東人、胆氣血性、学識皆過人、現往歐洲、擬留瑞士」という簡単な記述があったとき、そのまま消え去る幻の女性であるが、かりに作品が完成していれば、むしろヒロインの一人として描かれたに相違ない人物である。では、王端雲はどのような人物として想定されていたのか？

ここで想起されるのは、『新小説』創刊号から連載され、やはり未完のまま第五回（一九〇三年七月、『新小説』第五号）で掲載を打ち切られた嶺南羽衣女士著「（歴史小説）東欧女豪傑」である。この作品の作者については従来さまざまに詮索されてきたが、筆者はかつて馮自由等の証言に基づいて、それが羅孝高（羅晋）であると論定したことがある。¹⁰

この「東欧女豪傑」のヒロイン華明卿は、アメリカの婦人宣教師に養育され、スイスのチューリヒ大学哲学科へ留学、そこで革命運動に従事するロシアの女子学生たちと交流していたが、ある冬の夜、彼女はジュネヴァ湖畔の宿所

で、かつて『平等閣筆記』に記されていた「逆旅女子題壁三絶」を想い起こして吟じたあと、その第四首を次のような自作の詩で補った。⁽¹⁾

江山誰主費商量

江山誰が主か商量を費やさん

錦瑟華年枉断腸

錦瑟と華年とは枉しく断腸

忍説家園好風景

説うに忍びんや家園は好き風景なりと

斜風無頼雜斜陽

斜風は頼るなくして斜陽に雜わる

ここで『平等閣筆記』に記載された詩とあるのは、もと『新民叢報』第四号（一九〇二年三月発行）に掲載された作品で、『飲冰室詩話』にも引用されており、作者の狄葆賢から梁啓超に寄せられた七言絶句である。狄葆賢は、「庚子（一九〇〇年）仲冬、日本西京より日本の友人数人と玄海丸に乗り、国に返る」途中、朝鮮及び関東関外（関は中国の山海関——引用者）の諸地域を経過して当地の惨澹たる実状を目にし、その時の思いを次のような七言絶句に詠む（二一首の七絶は同韻であるから、制作時期から判断すれば、前者は後者に次韻したものである）。

関山一任誰家物

関山一任せば誰が家の物ならん

触眼吾民百感傷

眼に触るる吾が民に百感傷なわる

雪漫長空風滿地

雪は長空に漫い風は地に満ち

汽車載夢過遼陽

汽車は夢を載せて遼陽を過ぎる

そしてある夕暮れ、狄葆賢は投宿の際、一姥一僕を携え北に向かって旅立つ一人の女性に出会い、旅館に入ると、

壁にはまだ墨痕も乾かない状態の詩が三首と字体の識別できない一首が記されていたと記す。その作者が何者であるかについては、宿の主人もまったく知らない謎の人物として描かれている。

すでに明らかかなように、『新中国未来記』第四回に登場して、黄克強と李去病の「賀新郎」に次韻した王端雲は、羅孝高の「東欧女豪傑」のヒロイン華明卿であり、そのモデルは狄葆賢の『平等閣筆記』に描かれた謎の女性であった。『新中国未来記』第五回の記述にしたがえば、彼女はこれからスイスへの留学に旅立つ人である。

だとすれば、『新中国未来記』は、王端雲の登場する第四回（一九〇三年一月）から、その制作には早くも羅の手が加わっていた可能性も充分考えられるのである。現に第四回から登場する湖南武備学堂出身の陳仲滂には「少年中国之美少年」という美称が使用されており、それは梁啓超の筆名の一つである「少年中国之少年」に「美」の一字を付加した命名であるから、陳仲滂には梁啓超を想定していると思われるが、梁自身が「美少年」と記すのはやはり不自然である。しかし、第四回が発表された時（一九〇三年一月）、すでに訪米途次にあった梁に代わって羅が作品の一部に加筆したと考えれば、それは決して不思議なことではない。

六、末広鉄腸からの影響

題名にも表れているように、『新中国未来記』は作者梁啓超が構想する中国の未来社会を想定するものである。そして、この「未来記」の形式は、言論の自由が極度に制限されていた明治十年代の日本社会にあって、自由民権運動に携わる政治家たちがその政治理念を小説に仮託して表明するために作成した政治小説の類型であり、とりわけ国会開設の詔勅が出された明治十四年以後、あるべき帝国議会の姿をさまざまに論じた小説の形式であった。その多くが「二十三年」と記すのは、予告された議会の開設が明治二十三年であったからだ。次に掲げるのはそのいくつかの代表的な作品である。¹²⁾

- | | | |
|---------------------------|-------|--------|
| 『二十三年未来記』 柳窓外史（小柳津親雄） | 明治一六年 | 近古堂 |
| 『過去現在未来倭美談』 作者不詳 | 〃 | 大久保幸吉 |
| 『二十三年未来記』（上下合） 末広鉄腸 | 明治一九年 | 博文堂 |
| 『二十三年国会未来記』 服部誠一 | 〃 | 仙鶴堂 |
| 『内地雑居 未来之夢』 春のや朧（坪内雄蔵） | 〃 | 晚晴堂 |
| 『社会小説 日本之未来』 牛山鶴堂（良介） | 明治二〇年 | 春陽堂 |
| 『二十三年国会道中膝栗毛』 香夢亭校山 | 〃 | 大阪 競争屋 |
| 『政治小説 廿三年夢幻之鐘』 内村義城（秋風道人） | 〃 | 駿々堂 |
| 『二十三年後未来記』 末広居士（末広政憲） | 〃 | 大阪 畜善館 |
| 『町村制度 未来の夢』 雨香散士（唐端清太郎） | 明治二一年 | 駿々堂 |
| 『二十三年前滑稽議員』 竹天道人 | 〃 | 岡安書店 |
| 『廿三年候補者之夢』 逢水漁史（安西与四郎） | 明治二二年 | 鶴鳴館 |

上記以外にも、尾崎行雄（字堂）の『新日本』（明治一八年）や牛山鶴堂『日本新世界』（明治二〇年）のように「新」の字を冠した未来記もあれば、ジオスコリデス『新未来記』（明治二一年）のような翻訳物も当時の日本では通行した。また、そうした題名はなくとも、その内容が実質的に未来記の形態をとる作品も数多く見られる。なかでも、末広鉄腸の作品は『新中国未来記』の構成や内容にも影響を与えていることが知られている。¹³⁾

その形式については、明治一九（一八八六年）年に博文堂から刊行された『二十三年未来記』（原題は『夢ニナレナレ』、明治一八年一月の『朝野新聞』に掲載）の上篇では呻吟君（甲）と寝惚君（乙）の二人が新聞を読みながら、五

年後に予定された国会の開設に関して、文字通り申論乙駁するのであるが、その形式はそのまま『新中国未来記』第三回の黄克強と李去病とによる丁々発止の舌戦に応用されているとともに、前者が国会開設と同時に亜細亞博覧会を開くという構成は、後者の「楔子」で「維新五十年大祝典」と「大博覧会」が平行して開催される形態にそのままちこまれていたのである。

また、『政治雪中梅』は、国会開設百五十周年（明治一五三年）の祝日に土中から石碑が発見され、それが『雪中梅』と『花間鶯』を見つける発端になるという形式を踏んでいるが、作品の時代背景を六〇年後に設定した『新中国未来記』の書き出しは、まぎれもなくこの形式を襲っている。そして、その模倣は作品内容にも及んでいるのである。周知のように、末広鉄腸は明治一四年に板垣退助を総帥として結成された自由党の常議員ではあったが、その政治的理念はむしろより穩健な大隈重信ら立憲改進黨のそれに近いものであり、『自由新聞』が改進黨の攻撃を始めた時には自由新聞社との關係を絶ち、板垣總理洋行の費用の出所をめぐって党内が紛糾した時には自由党を離脱した。そして明治二〇年、「所謂井上伯の条約改正中止に際し世論漸く外交に傾注するを機とし氏は熱心に自由改進黨の間を調停」しようと試みたが成功しなかったという。

彼の『政治雪中梅』（明治一九年）および続編にあたる『政事花間鶯』（明治二〇年）は明治二三年の国会開設を視野に入れて描かれた未来記であるが、そのテーマは、『二十三年未来記』同様、立憲君主制を理想とする作者末広鉄腸の政治理念を体現するものであり、自由党を標榜する民権運動家の国野基と急激党の武田猛および保守党の川岸萍水ら三人による政争が全篇にわたって展開され、最後には国野が勝利をおさめるという筋立てになっている。ここでの自由党が掲げる理念は、実際には当時の改進黨のそれであり、急激党の主張はむしろ自由党に該当した。

『新中国未来記』における黄克強と李去病の思想的立場は、黄が国野基の自由党（日本の改進黨）、李が武田猛の急激党（日本の自由党）に相当しており、作者梁啓超の立脚点は自由党を名乗る国野基のそれに近く、かつては自由党に所属しながら、改進黨との大同団結に奔走した末広鉄腸にほぼ等しかった。

『新中国未来記』の第二回では、立憲期成同盟が後に国権党と愛国自治党および自由党の三大政党に分かれたと記しているが、これを『雪中梅』の政党にあてはめた場合、国権党は保守党（明治政府）、愛国自治党は国野基の自由党（日本の改進黨）、自由党は急激党に相当し、梁啓超は愛国自治党にあって急激党（自由党）にも一定の理解を示す末広鉄腸ということになるだろう。

かつて、中村忠行氏は『新中国未来記』への『佳人之奇遇』の影響について具体的に指摘されたことがあった。⁽¹⁵⁾そして、たしかに前者に対する後者の影響は大きく、そもそも政治小説というジャンルが中国へ導入される契機となったのが『佳人之奇遇』の漢訳であったことを想起すれば、両者の関係は単なる影響関係にとどまるものではない。このことについては、筆者自身も具体的な分析を試みたことがあり、特にその翻訳に見られる特性については詳細な論証を行なった。⁽¹⁶⁾

けれども、それはあくまでも翻訳（部分的には改作）を通しての導入ということであって、『新中国未来記』という梁啓超の実作に対する形式・内容両面にわたる制作上の直接的な影響ということになれば、末広鉄腸の『二十三年未来記』や『雪中梅』『花間鶯』といった一連の政治（政事）小説をまず指摘しなければならない。『佳人之奇遇』に触発されて、中国への政治小説の移植を考えていた梁に、創作上の具体的な暗示を与えたのは、まぎれもなく鉄腸の作品群であった。

七、「革命」から「変革」へ

『新民叢報』第二号（一九〇二年二月四日）に、梁啓超は「積革」と題する文章を掲載した。梁によれば、漢字の「革」には英語の「ReformとRevolution」に相当する二つの意味があり、Reformは「其の固有するところに因ってこれを損益し、善に遷す」ことであり、「英国国会一千八百三十一年のRevolution」がそうであって、日

本人はこれを「改革」あるいは「革新」と翻訳する。一方、「法国一千七百八十九年の Revolution」のように、「根柢の処よりこれを掀翻して別に一つの新世界を造る」ことを、日本人は「革命」と翻訳する。

中国では「革命」という文字を、「湯武革命」のように王朝の交替を意味する「易姓革命」の意で使用してきたが、これはむしろ Revolution とは異なる名詞である。そして、梁自身は「Reform」に「改革」、Revolution に「変革」という訳語をあてるよう提案するのである。それは「革命」という用語に人々が抱く恐怖感を避けようとする試みであり、その上で、彼は Revolution の事業（変革）が「今日、中国を救う唯一無二の法門」であると断言する。

また、「淘汰」とは「変革」のことであって、それは政治上のみならず「群治（社会）の中」の万事万物に適用されなければならない。日本人はそれを訳して宗教の革命、道德の革命、學術の革命、文学の革命、風俗の革命、産業の革命と称するのであって、今日の中国では「経学革命、史学革命、文界革命、詩界革命、曲界革命、小説界革命、音楽界革命、文字革命」の類となるが、それらの名詞は「朝廷・政府」と対立する概念ではなく、恐れるに足りないものであるという。

要するに、梁は社会のあらゆる分野での根本的な変革が必要であることを強調し、それらに「革命」の語を附したいたのであったが、やはり「革命」の二字が人々に与える強烈なイメージを警戒したため、文化面での変革には「革命」の語を使用するものの、政治上のそれには「変革」の語をもって代替しようとしたのである。このような梁啓超から見れば、世界史上で「革命」の名に値する変革は「千七百八十八年英国之役、千七百七十五年美国之役、千七百八十九年法国之役」であって、日本の明治維新にいたる尊王討幕、廢藩置県も「革命事業」そのものであった。

吾れ故に曰う、国民もし自ら存するを欲すれば、必ず大変革を力倡し大変革を實行することより始めよ。君主官吏にして国民に附して自ら存することを欲すれば、必ず大変革を畏れることなく大変革に賛成することより始めよ。嗚呼、中国の大変革に当りては、あに惟だ政治のみならんや。然るに政治上なお変ずるを得ず革するを得ざ

れば、また其の余を遺しく論せんや。嗚呼。(「積革」)

この当時(一九〇二年末)の梁啓超にとって、「革命」と「維新」とはそれほど矛盾する概念ではなかった。それはイギリスの名誉革命やアメリカの独立戦争、フランス革命のように「必ず其の群治の情状を一変して、幡然として昔日に異なるところを以て、今を彼の如く有らしむ」るものでなければならなかった。そのような観点からすれば、「明治以前」が「明治以後」とまったく異なる社会——「天地」となった日本の明治維新も、「革命」の範疇に入る。「変革」だということになる。

そうであってみれば、犬養の調停で「孫康合作」に踏み切ろうとしてハワイに追放された一八九九年末と、その挫折三年後に提起した「変革」との間には、やはり一定の距離が生じていると見るべきであろう。前者の場合には、光緒帝の地位を保全することは困難である。だが、雑誌『新小説』を発売して『新中国未来記』を発表し、「積革」で「変革」を提示した一九〇二年末には、共和制国家の建設を理想としながらも、光緒帝には自発的な退位と「大中華民主国」初代大統領への就任を想定している。「変革」は「革命」に等しいといながらも、その内容は限りなく「維新」に近く、また現に『新中国未来記』では「維新」の語を使用している。

先にも述べたように、一九一二年に共和制国家の建設をはかるといふプログラムは「変法自強」派にはなかった。『新中国未来記』の創作された一九〇二年は、中国の未来像をめぐる「革命派」と「維新派」とが激しくヘゲモニー争いを展開していた時期である。そうした中で、共和制の実現を目指しながら、それでいて光緒帝の地位を保全しようとする梁啓超の構想は論理的に整合性をもつことができず、それが『新中国未来記』第三回での、黄克強と李去病による激しい論争の展開となり、同時にRevolutionの訳語に「変革」をあてるといふ「積革」での提起になったと考えられよう。

いうなれば、革命と維新との間で揺れ動く梁の心情が、一九〇二年の時点で「変革」という用語に収斂したのだと

考えられるのである。その外観は「革命」に類似するが、その内実は光緒帝の保全を留保した「維新」であった。少なくとも『新中国未来記』創作段階の梁にとって、「革命」とはそのようなものであった。プロットの展開から、必然的にフランス革命を予想させる「洪水禍」や、ロシアのナロードニキ運動を描いた「東欧女豪傑」の連載が雑誌『新小説』で中断され、王端雲という女性の登場からナロードニキ運動の展開が示唆される『新中国未来記』の第四回以後は、やはり連載を継続するわけにはいかなかった。それが梁啓超における「革命」から「変革」への論理的帰結であった。

注

- (1) 「三月二十四日、先生有一封家信、講到将要游歷美洲、所以暫緩接眷属来日。可見先生游美開辦商界的計畫、早已決定……」(「文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』一九八三年、上海人民出版社、一七九頁)。
- (2) 「五月、渡日本、游覽東西兩京。時卓如在橫濱、余往候之。值清廷遣劉學詢、慶寬等撰錄康梁、為東人笑。香山孫文逸仙時在橫濱、余于卓如坐中遇之、未相知也(章炳麟『太炎先生自定年譜』光緒二十五年、一九六五年、香港・龍門書店)。
- (3) 於是由梁草擬一上南海先生書、文長数千言(馮自由『革命逸史』第二集「康門十三太保与革命党」、一九六九年三月、台湾・商務印書館)。
- (4) 馮自由は(3)の『革命逸史』及び『中華民國開國前革命史』(第六章「革命保皇兩党之衝突」)で、この年、梁啓超が香港におもむき、陳少白、徐勤らに兩党合同の事を告げ、連合章程起草するよう委託したところ、徐勤と麦孟華がひそかに反対し、当時シンガポールにいた康有為に密告したと記すが、梁啓超は一八九九年には香港を訪れていない。なお、馮自由は「欧策申」を「区策申」と記載する。
- (5) 『梁啓超年譜長編』二三四—三三五頁。
- (6) 「大中華民國」というのは、梁啓超が一九二二年に行なった「鄙人對於言論界之過去及未來」(一九二二年一月『庸言報』創刊号、『飲冰室文集』二九に収録)と題する演説の中で述べた国名である。島田虔次訳『新中国未来記』(平凡社「清末民国初政治評論集」)の注では「大中華共和国」と記す。島田虔次訳『言論界における私の過去と未來』(筑摩叢書『中国革命の先駆者たち』所収)では原文通り「大中華民國」という名称が使用されている。

- (7) (6) と同じ。
- (8) Keiko Koekum 'Japanese Achievement Chinese Aspiration: A Study of the Japanese Influence on the Modernization of the Late Qing Novel' *Orientaliska Studier*, Stockholms universitet, 1990, pp. 166-167 によれば、'いつした議論の中のフランス革命に対する梁啓超の見解には、Henry Thomas Buckle's History of Civilization in England および François Pierre Guillaume Guizot, *Histoire générale de la civilisation en Europe depuis la chute de l'Empire romain jusqu'à la Révolution française* の影響が見られるという。具体的な論証は行なわれていないが、後者は明治十年に『歐羅巴文明史』と題する永峰秀樹の英訳からの重訳本が奎章閣から刊行され、明治時代の日本人がヨーロッパ文明を理解する上で大きな役割をはたした。福沢諭吉の『文明論之概略』が後者から啓発を受けていることは、丸山真男著『文明論之概略』を読む(岩波新書)などによっても明らかである。ギゾーのこの書物は梁啓超も目にしていたらしく、その『東籍月旦』で、「欧羅巴文明史 法国基梭著 永峰秀樹訳 十六冊」を著録し、「基氏為文明史学家第一人。此書在欧洲、其声価幾与孟德斯鳩之萬法精理盧梭民約論相埒。近世作者。大率取材於彼者居多。此本乃由英文重訳。間有估屈不能尽達其意。出版在明治九年。距今幾三十載矣。用漢式釘装。格式頗陳旧。現坊間頗難得。学者宝之」と記している。筆者はたまたま、同書が岡山藩の藩校の伝統を継ぐ閑谷学校で明治二〇年に制定された「学科課程表」に、第三年後期の英文テキストとして採択されているのを発見して、その当時の日本社会における影響力の一端を垣間見る思いがした。日訳者の永峰秀樹については、柳田泉著『明治初期翻訳文学の研究』(一九六一年、春秋社)に「永峰秀樹伝」が掲載されている。
- (9) 丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』三一一—三二二頁
- (10) 山田敬三「新小説」としての『歴史小説』(上・下)(一九八四年、神戸大学文学部『紀要』第一号、一九八五年、同上第二号)。
- (11) 嶺南羽衣女士著・談虎客批「歴史小説東欧女豪傑」第二回(『新小説』創刊号)。
- (12) 引用は柳田泉「政治小説年表」(『政治小説研究』下巻)による。
- (13) たとえば、王曉秋『近代中日文学交流史稿』(一九八七年、中華書局香港分局・湖南文艺出版社)、夏曉虹著『覺世与伝世——梁啓超的文学道路』(一九九一年、上海人民出版社)。
- (14) 村松柳江「故末広重恭氏小伝」(明治三十一年一月、青木高山堂、鉄腸叢書『政海之過去』所収)。
- (15) 中村忠行『新中国未来記』攷説——中国文芸に及ぼせる日本文芸の影響の一例——(一九四九年五月、『天理大学学報』

一一一。

(16) 山田敬三「漢訳『佳人之奇遇』の周辺——中国政治小説研究札記」(一九八二年三月、神戸大学文学部『紀要』第九号)。